語感を磨き、豊かな言語感覚を養う授業づくり
～常用漢字表改定を語彙指導に生かす～

鹿児島県薩摩川内市立里中学校
中村　洋一

はじめに

今回の常用漢字表改定の動きは、教育現場の指導の負担を増すと言われているが、いっぽうで、生徒の漢字（漢語）に対する関心を高め、語感を磨き、ことばにこだわる態度を培う好機だとも考えられる。

私は、この機をとらえて、生徒の理解語彙を表現語彙へと高めるために、授業設計の在り方（語彙指導）を再考することにした。

一　語彙力のとらえ

生徒の語彙（ことば）に対する興味・関心の程度は、生徒個々が抱いているスポーツ、芸能、歴史、文化などへの関心によって、当然にも異なっている。このことを軽視し、語の獲得にとらわれた指導を行うと、生徒に負担を感じさせる学習になってしまいかねない。

語の獲得変容とは、子どもの既有の語彙体系に未知の語が組み込まれたり既知の語の意味が変容したりして、体系が変化することである。しかも語が獲得されたり変容されたりするためには、既有の知識体系の一部が、その学習のために呼び覚まされなければならない。よって「語彙力」は、教材を学習させる中で、文脈上の意味との関係に注意しながら語句への理解を深めることで身に付けさせていくもの。また、使われている語句の背景や象徴的な意味を探りながら、豊かにしていくものであるととらえる。

二　授業設計の工夫

「語彙力」を高めるために、生徒にことばを学ぶ意義（言語感覚が磨かれ、理解力や表現力、論理的思考力が高まるとともに、豊かな情緒が育つこと）を実感させる授業設計を工夫した。すなわち、教師が主体となって語彙力や言語感覚を育てる場（ことばを学ばせる場）と、生徒が主体となって自ら語彙力や言語感覚を高めていく場（ことばで学ぶ場）を有機的に関連づけた授業を展開することにした。そうすることによって、生徒は学ぶ意欲を高め、国語学習の必要性を実感しながら、よりよいことばの使い手になろうとする意識や態度を高めていくと考えた。

三　「ことばを学ばせる」と「ことばで学ぶ」

「ことばを学ばせる授業」と「ことばで学ぶ授業」のとらえは、以下のとおりである。

【ことばを学ばせる授業】

語句や語彙を習得させ、言語感覚を育てる授業

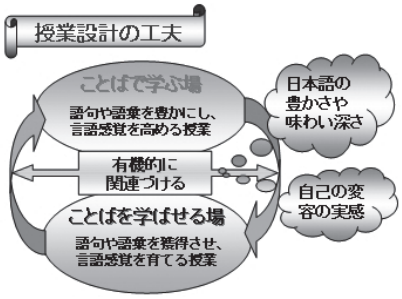
・教師が意図的にことばに着目させ、美醜や適否、正誤について検討させたり、美しいことば、適切なことば、正しいことば遣いをじっくり味わわせたりする授業

・辞書を活用させたり、重要語句の見つけ方を学ばせたりし、その語句が文脈の中で果たす役割や効果をとらえさせる授業

【ことばで学ぶ授業】

語句や語彙を豊かにし、言語感覚を高める授業

・生徒が習得した語句や語彙、言語感覚を生かしながら、重要語句を見つけ、文脈の中で果たす役割や効果を自らとらえる授業
・友達とことばの美醜や適否、正誤等について話し合ったり、重要語句の関係をとらえたりしながら、語彙力や言語感覚を高めていく授業



四　実践例1（ことばを学ばせる授業）

（一）改定常用漢字表を活用した「語感を磨く」授業（三年）
「和語・漢語・外来語」の微妙な語感
（二）身に付けさせたい力
「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」のイの㈠「慣用句・四字熟語などに関する知識を広げ、和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感を磨き語彙を豊かにすること」
（三）指導の手だて
まず、和語、漢語、外来語、それぞれに対する個々の語感の微妙な違いに対する関心を高め、生徒の内発的動機づけを促すために、外来語「スピード」を和語・漢語に換えさせ、「速さ・速度・スピード」の微妙な語感の違いを話し合わせた。次に、外来語を転化させた和製外来語「ブルーな気持ち」を提示し、新常用漢字表から「ブルー」の部分に合う熟語「憂鬱」を探らせ、「ゆううつ・憂鬱・ブルー」の微妙な語感の違いを話し合わせた。さらに、二つの和語「きれい」「美しい」の微妙な違いを探らせ、新常用漢字表や辞書を活用し、「美しい」の意味を表す次のような熟語を抽出させた。

・清楚…品よく美しい　・華美…華やかで美しい
・壮麗…立派で美しい　・妖艶…あやしく美しい
・鮮麗…くっきりと美しい

五　実践例2（ことばで学ぶ授業）

（一）習得した語彙を活用した「ことばの魅力」に触れさせる授業（一年）
「探ろう！言葉の微妙な違い（枕草子）」
（二）身に付けさせたい力
「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」のイの㈠「語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨くこと」
（三）指導の手だて
まず、「朝焼けの写真」を提示し、清少納言の描写「をかし」を意識させながら、自己の語彙力を尽くして情景描写をさせた。次に、前時で習得した「美しい」を表現し微妙に意味の異なる五つの語句（上記）を提示し、自分の思いにふさわしい語句を理由もあわせて考えさせた。さらに、選んだ語句の異なる者同士が同じ班になるように組み分け、自分の意見をそれぞれ発表させ、質問や討論を行わせ、ことばの微妙な違いを吟味、追究することの意味・意義に気付かせた。

おわりに

はじめにも書いたが、「読めるが書けない漢字の増加」「ことばの誤用やカタカナ語の多用化」「ことばの意味の単純化」などが問題視される現況に鑑みると、常用漢字の改定は、生徒たちにとって、語彙学習の好機だと考えられる。

さらに、メールの文章に着目させるなどして「美しい日本語とは」という「自己内対話」を促すために、生徒の「価値観」を「揺さぶり」続け、豊かな言語感覚を養いたい。

なかむら　よういち　二三年間、魅力ある授業づくりを模索している。漱石のような愛、松蔭のような情熱、海舟のような広い視野をもった教師、いや先生になりたい。